

**「市民力」で描く水都大阪  
残された水辺からコモンズの再生へ**

弘本由香里

土地や空間の価値が限りなく経済価値に置き換えられ、私有化あるいは私的管理が極度に進んでいる。それが日本の都市の現状であり、目の前に広がる大阪の都市景観もまた、その典型といえるだろう。対象をセグメント(細分)化する市場の論理だけで都市空間が隙間なきほどに埋め尽くされてしまえば、多様な属性の人間が会う本質的な意味での都市コミュニティは形成され得ないことになる。そこに日本の都市の不幸があるといっても、過言ではないのかもしれない。

こうした逆境をいかに乗り越えていけばよいのか。「広場がなければ革命は生まれない」「日本の都市に結局、本当の意味での近代的広場は形成されなかったのではないか」。こうした言葉が、日本の近代的都市計画を批判し、21世紀型の都市・社会を標榜する議論のなかで、近年頻繁に聞かれるようになってきた。つまり、「都市再生」であれ「水都再生」であれ、重要なのは「誰が誰のために何を再生しようとしているのか」という原点に立ち返って考えなければならないということだろう。

そして、今、この大阪のまちの中に、社会を変える場としての可能性を秘めた「広場」に代わり得る公共空間を見出すとすれば、そのひとつは間違いなく私有化された都市空間の中に裂け目のように存在する「川」であり「水辺空間」ではないかと、確信的に思うのである。なぜ、川と水辺がコモンズ(共的資源)の象徴足り得るのかといえ、そこには歴史的に人と環境と暮らしの営みの中で培われてきた役割やルール、共的管理によって活かされてきた川や水辺の存在と可能性を見出すことができるからである。

かつての社会では、流域にもたらされる水害の脅威に向き合う必然性や、貴重な環境資源としての水や水辺を分け合って使う必然性など、社会を維持していくために不可欠の避けがたい理由や目的が、個々の生活の営みに直結する形で認識され、共有化されていた。しかし、近代化の過程でコモンズの知恵の多くは失われ、忘れられてしまった。結果、危機に対する感性や対応力の弱化、ローカルな景観秩序の崩壊や生活文化の喪失など、都市の未来を創造するためにはなくてはならない資源を大きく損なっている。

であるとすれば、「水都再生」とは「市民によるコモンズの再生」という視点から、共有すべき資源を構築し直していくべきものだということが明らかとなってくる。重要なのは、対象物として川や水辺を限定的に捉える視点ではなく、むしろ都市再生の精神的基盤を形成していくために異なる価値観をゆるやかにたばねてメタレベルのビジョンを形成していくため、都市の未来を創造していくためにはなくてはならない装置として川や水辺の機能を再発見していくことである。そして、それを戦略的に自覚した都市計画や都市経営の思想

であろう。

水辺の空間を例にとれば、建物を水辺に向けて建てることやプロムナードをつくることだけを目的化して終わるのではなく、水辺に向き合う営みが周囲の景観や生業や日々の生活のありようを問い直すことにつながっていくことこそ本来の目的といえるだろう。そこから、大阪ならではの暮らしの知恵や都市文化が再生されていくことになるのではないだろうか。

こうした確信を皮膚感覚で捉えるタフな市民たちが、全国各地で水辺からコモンズの再生にアプローチし始めている。例えば、堀の再生に挑んだ市民の力が連鎖的な市民活動のエンパワーメント(問題解決力の発揮)をもたらした地域文化の再生につながっている都市。あるいは、川の再生に多様な住民を巻き込みながら共的な価値観を育み、そこから個々の住まいのあり方を考え、まちなみの再生に取り組んでいこうとしている地域など。もちろん物語の主演は、市民である。

大阪が「水都再生」を都市の目標に掲げるのであれば、こうした姿勢を自ら貫き通そうとしているかどうか、世界の市民から問われることになる。

## プロフィール

筑波大学芸術専門学群卒業後、住宅建築専門誌編集員等を経て、大阪ガスエネルギー・文化研究所客員研究員に。立命館大学政策科学部非常勤講師のほか、まちづくり等のNPO運営にも携わる。共著に『大阪新・長屋暮らしのすすめ』など。